

ピアノ アドバイザー



田島 恵理

足利市出身。

足利学園高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。卒業後、初リサイタル以来、ほぼ隔年に演奏会を開催。'96 イタリアチェルボ音楽祭にて、ゲーリングス指揮によるショパンピアノ協奏曲第2番を演奏。その後、ドイツに渡り ドルトムント音楽大学でディプロマ修士、ケルン音楽大学でドイツ演奏家国家資格を取得。第47回マリアカナルス国際コンクールでディプロマ賞受賞。カントウ国際コンクールファイナリスト。以降、25年間 ドイツで研鑽を積む。D'Konzert を結成し、フランクフルト ベヒシュタインセンターでのピアノリサイタルをはじめ、プ라운ハイム教会や Altenzentrum Santa Teresa において定期的にコンサートを開催。国内では、郷里の足利市を中心に、東京、神奈川等で演奏活動を展開。NHK 交響楽団奏者とのプレミアムコンサートに出演し、小学校の音楽鑑賞会にも巡回。N響ヴィルトゥオーゾカルテット(斎藤真知亜、大宮臨太郎、店村真澄、藤森亮一)とドヴォルザークピアノ五重奏曲の共演や、東京文化会館(小)にて大宮臨太郎カルテットとシューマンピアノ五重奏曲等を演奏。

ピアノリサイタル『回想～そして再び』東京銀座王子ホール、ベートーヴェンピアノソナタシリーズ紀尾井サロンホールで開催。足利では、第10回足利カンマーオーケスター定期演奏会のソリストとして田中祐子指揮グリーグピアノ協奏曲、足利交響楽団定期演奏会ベートーヴェンピアノ協奏曲第4番に出演。あしかがフラワーパークニューイヤーカーンコンサート、ピアノリサイタル『ラ・カンパネラ』、足利市民会館閉館コンサートを足利市記念事業と共同開催し、リストピアノソナタほかを演奏。2022年2月宇都宮短期大学特別講座『ドイツの息吹を演奏に活かす』、同年9月宇都宮短期大学主催『欧州からの風シリーズ』にてレクチャーコンサートを担当。

これまでに直井文子、笠間春子、小島準子、A.アルニム、V.ロバノフの各氏に師事。

現在、宇都宮短期大学音楽科講師、全日本ピアノ指導者協会ピティナ正会員、ドイツ日独協会とちぎ会員。

はじめに

満場の喝采を浴びる輝かしいステージに向けて、みなさんは日頃どのような準備をしているでしょうか。ここでは、ソリストとしてのピアノ演奏とそのパフォーマンスについて、考えていきたいと思います。

1. 表現することを明確にする

まず、“良い演奏”とはどのような演奏でしょうか。私が初めてドルトムントで演奏の依頼を受けた際、お客様は音楽に心地よさを求めているので、それに沿う演奏を！と主催者からのリクエストがありました。イタリアの音楽祭では、真夏の夜にふさわしいショパンを！ デトモルトでは、アカデミックなベートーヴェンを！ ボッフムでは、華やかなブラームスを！と様々でしたが、このように主催者や観客の要望にお応えすることも、“良い演奏”のひとつとなります。ドイツの演奏会では、期待外れだったり、入場料と見合わない場合に起こる聴衆のリアクションを目にすることもありました。

ピアノリサイタルにおいては、選曲（プログラミング）全体を通して、ひとつのメッセージを作り出すことが求められています。クラシック音楽が継承する様式や文化的背景を捉えた上で、演奏者は独自の視点を持ち、何をクローズア



フランクフルト ベヒシュタインセンターでのピアノリサイタル

ップしたのか、わかるように構成することが理想です。多彩なレパートリーを編集するリサイタルもありますが、その時は、プログラムノートなどを活用し、どこかに一貫性を持たせる等の工夫が必要となります。

輝かしいステージへの準備として、このように、何が求められているのか、場にふさわしいかという視点を持つことは、表現すべきことを明確にする手段のひとつとなるでしょう。学びの過程においては、審査される機会が多いため、“良い演奏“というものを限定的に捉えてしまう傾向があります。しかし演奏会の趣旨や聴衆の層によって多種多様に評価の基準があることを知っておくと、演奏家として表現の幅が広がることでしょう。

2. 本番直前、さてどうする？



“演奏する喜び”は、誰しも感じたことがあるでしょう。その喜びこそ、輝かしいステージの源となります。しかし、それだけでは乗り切れない難しさも感じているのではないのでしょうか。いくつかヒントをお伝えしますので、共感できる部分は参考に見てみてください。

ヒント1

憧れの気持ちを強く持ち、真似をする！

学習段階において、他の人の演奏を見聞する機会が増えていきます。その中で、「カッコいいなあ、素敵だなあ」と思うような

演奏に出会ったら、まずは、真似をしてみましよう。さまざまな経験を集積し、自分の心から沸き起こる表現に気付くようになるまでは、美術で造形模写を学ぶ時のように、『模倣』という学習も大切です。憧れのピアニストになりきって、ステージに出てみるのもよいでしょう。

ヒント2 ピアニストは指揮者！

例えば、大縄跳びは最初の回し始めに大きな力がかかりますが、縄の長さや重さを感じていくうちに規則的な動きをつかむことができます。ステージでの演奏も、先ずはこのような動きを作り出すことが表現の最初のステップとなります。そこから音楽の心臓部が生み出されます。指揮者や共演者のいないピアノソロ演奏では、縄を回す役、飛ぶ役、双方のイメージを持ち、先ずは縄を回し始めるような心構えが必要となります。

指揮者が音を出す前に何をしているのか等に思いをめぐらせ、あなたの演奏にも取り入れてみましょう。

ヒント3 演奏は生もの、フレッシュな演奏を！

フレッシュとは、新鮮！ということですが、フレッシュな演奏には躍動感があり、生命力があります。どんなに直前まで思い通りに弾けていたとしても、準備した通りに弾こうと思った途端に、音楽は停滞し、生命力を失ってしまいます。そのような演奏を、ドイツ語で、乗物から降りたという意味の「ausgestiegen」(アウス ゲシュティーゲン)ということがありますが、まさに本番は、自分で何かを操縦するかのようなファンタジーを持ち、未知の旅へと聴き手を連れ出すようなエネルギーが必要です。

普段と違うピアノの状態に気をとられず、「出たとこ勝負」くらいの心構えをしておくのも、よいかもしれません。今、ここ！で音楽が誕生する瞬間を楽しみましょう。

おわりに

翼を広げ、羽ばたく！

冒頭では、演奏に何が求められているかについて視点を向けましたが、本来、ピアノソロとは、自由な自己表現です。

成長した姿を家族や友人にみてほしいという気持ちや、作品を通して感じることを共有したいという気持ちなど、原動力は様々ですが、そこには常に自由があります。作曲家自身がピアノに向かい、何と対話してきたかを想像することも自己表現のひとつです。音楽に込めた想いを自由に感じてみましょう。

ドイツ語で、グランドピアノは「Flügel」フリューゲル、つまり『翼』です。ステージに羽を広げたように置かれたピアノは、あなたの感じたことを乗せるためのものです。さあ、満場の喝采を浴びる輝かしいステージへ、あなたの翼を広げ、羽ばたきましょう！



リヒテンブルグ ハウスマルトウー演奏会場にて